

デザイン・キャラバン

Design Caravan

1017171 鈴木ほのか Honoka Suzuki

1. プロジェクトの概要と背景

今日の社会においてデザインの重要性は増してきている。一方で、デザイナーとユーザのかかわりが薄く、デザイナーが制作した製品をユーザが受け身的に活用するという一方通行な流れのデザイン形態が存在する。本プロジェクトは、デザインを専門とする筆者らが実際に地域コミュニティに入り込み、地域と自分たちが互いに影響しあうデザイン活動を行うことが目的である。すべての活動において、「訪問する」、「入り込む」、「考える」、「振り返る」の4つを活動方針とする。実際に地域を訪れ地域の生の声を聞くことで、すべての事柄を自分事としてとらえ主体的に考え活動を行う。さらに行った活動に対して振り返りを行い、活動における成果や学びをプロジェクトメンバー内で共有する。

なお、本プロジェクトは学外の様々な地域や団体と関わり、紙面デザインやWebデザイン、電子工作などのデザイン活動にとどまらない多種多様な活動を行うことを目標とする。

2. 活動における課題の設定

本プロジェクトでは、実際に地域に入り込むことで、従来のような一方向なデザイン活動ではなく、地域と双方向に影響しあう活動を目標として設定した。道南の様々な地域を訪問し実際に地域や地域の人々と関わる中で、何事も当事者としてとらえ筆者らに何ができるのか、情報デザインの技術をどう生かせるのかを常に考え、主体的に行動することを課題とした。そのため本プロジェクトは、現状の問題点を発見しそれを解決するプロジェクト形態をとるのではなく、筆者らが実際に現場を体験し、その中で発見した課題に取り組むというプロジェクト形態をとる。すべての活動において、筆者らが学んだことを可視化し、大学での学びを実際の社会に生かすことによって、大学の講義では得られない経験やスキルを身に付け、これからの社会における情報デザインの必要性や可能性を身をもって実感することを重視した。

3. 具体的な活動

3.1 洞爺湖町訪問

洞爺湖町訪問の概要

洞爺湖芸術館主催のモバイル制作ワークショップに担当教員の原田教授が講師として招かれたため、そのサポートのために洞爺湖を訪問した。モバイル制作ワークショップのファシリテーションが主たる目的であったが、その他にも洞爺湖町のフィールドワークや洞爺湖芸術館の訪問も活動目的に含まれていた。

洞爺湖町訪問の成果

このワークショップで参加者と対話する中で、洞爺湖町には高校がなく若い世代は中学生までしかいないことや、GWなどの観光シーズンは親世代が忙しく子供の面倒を見ることが困難だと知ることができた。そのため、今回のワークショップでは子供たちが新しい体験をするだけでなく、今まで関わりの少なかった筆者らのような大学生の世代と関わる機会を提供することができた。洞爺湖町訪問後にはワークショップだけでなくフィールドワークも含め洞爺湖町で感じたことや発見したことをまとめ、図解化を行った。そこで、洞爺湖町は「遊び」「環境」「交流」の3つの要素が特徴的な町であるにとらえることができた。そしてこれらの要素から、洞爺湖町は住民同士のかかわりが深く、旅人を温かく迎え入れてくれる家族のような町だと感じ、筆者ら自身が地方都市での生活の魅力に気づくための1つのきっかけとなった。

3.2 レインボーはこだてプロジェクト (RHP)

レインボーはこだてプロジェクト (RHP) の概要

レインボーはこだてプロジェクト(以下 RHP) とは、「LGBT」を知ってもらうことで、誰もが自分らしく暮らし、自己実現できるような函館・道南の地域づくりを考えるプロジェクトである。筆者らは2019年6月に開催された RHP 主催のイベント「虹を歩いて歩こう」に向けてデザインチームとして活動に参加し、イベント開催のために必要なポスターや物品の制作に取り組んだ。イベントまでの約三ヶ月の間、毎週行われた話し合いに参加し、制作物に対してコメントやアドバイスをいただいたり、イベントの企画に対して提案をしたりした。また最終的には当初予定していた以上の数の物品を制作し、イベントだけでなく今後の RHP の活動に役立つロゴや Web などの制作も行った。

レインボーはこだてプロジェクト (RHP) の成果

筆者らがイベント開催において制作したものは、イベント宣伝用のフライヤーをはじめ、講演会用のフライヤー、ブースパネル、スタンプラリー用のスタンプと台紙、缶バッジと靴下のパッケージ、そして動的展示台のくるくるレインボーマシンである。これらの物品はイベントを行う上で重要な役割を占めていたと感じている。イベント参加者に対するアンケート調査では、参加者のおよそ2割がポスターを見て来場したという結果が出ている。また当日の会場の様子から、企画したスタンプラリーでは小さな子どもも楽しめているようだった。以上のようなことから、筆者らはデ

ザインチームとして十分に寄与したと評価することができる。今後の活動も見据えて制作したロゴマークやWebサイトは、一般の人がLGBTについて知るためのきっかけとなることが考えられ、これからも利用し続けてもらえることを期待したい。

3.3 厚沢部町訪問

厚沢部町訪問の概要

プロジェクトの担当教員である原田泰教授により、厚沢部町在住の荒木さんご夫妻を紹介していただいた。荒木さん達は、2011年に起こった東日本大震災時に感じた無力感により、「人間には食べ物とエネルギーが必要だ」と考え、厚沢部町で食べる物からエネルギーまで多岐にわたって生産を行い、半自給自足の生活を送っている。生活において様々な工夫を行っている荒木さん宅を訪問し、生活を見学させていただくことで情報デザインの視点から気づきや発見が得られるのではないかと考えフィールドワークを行った。

厚沢部町訪問の成果

厚沢部町を訪れ荒木さんにお話を伺いながら、飼育している鶏に触らせて頂いたり、自家発電や家庭菜園の様子を見学させて頂いたりした。その中で、荒木さんは日々の生活の工夫を楽しみ、娯楽を自分自身で作っていると感じた。身近な生活の場で環境に応じた工夫をしている姿を見て、無いものをねだるのではなく、今いるフィールドで何ができるのか、何がしたいのかを創意工夫をする姿勢は大変勉強になった。今回のフィールドワークを経て、荒木

さんの生活は様々な要素が混ざり合っていると感じ、荒木さんの生活を「ハイブリッド生活」と捉えた。まとめを行うに伴い、様々な要素を電力、動物、農業に分類したことにより、それぞれの要素もまた地域社会や生活の中で循環していると気づいた。最後に活動の成果として、プロジェクトメンバー内で振り返りを行い、フィールドワークによって学んだことを一冊の本にまとめた。

3.4 木づかい合宿

木づかい合宿の概要

木づかいプロジェクトが主催する木育活動の一環として、学生アパート計画コンセプトワーク合宿が開催された。これは函館市内にあるアパートメントを、学生向けアパートメントへ新築するにあたり、大学生を中心に学生アパートメントのプランニングを行い、道南スギを学びながらコンセプトワークを短期集中型（合宿）で行うものである。合宿には専門性の違う数多くの学生が参加するため、互いの意見や考え方に触れる貴重な機会になるのではないかと考え参加することにした。この活動においての目的は、様々な専門性の学生たちと協力し、学生アパートの新しいコンセプトを提案することである。またプロの建築家やデザイナーから学生まで様々な人々と関わる中で、生きる考え方や技術を学ぶことを期待した。

木づかい合宿の成果

フィールドワークから完成までの一連の流れを三日間という短期間で行ったことは初めてだったため大変貴重な経験になった。ただコンセプトを考える

ではなく、筆者らの日々の生活を見直し、より良い暮らしのためには何が必要なのかを考えることで、今の筆者ら自身の生活を見直すきっかけにもなったのではないかと考える。また参加者には筆者らと同じ情報デザインを学ぶ学生も多く、同じ専門性の学生と触れ合うことで、相手の発想力や表現力に驚かされる機会も多々あった。その一方で筆者らの大学での学びを生かす機会もあったため、今現在大学で学んでいることの意義を再確認することもできたのではないかと考える。

4. まとめ

本プロジェクトは、実際に様々な場所を訪問し、筆者ら自身が地域コミュニティに入り込み活動を行うことで、地域の生の声を聞き、地域の特徴を理解することを目標に活動を行った。活動を行うにあたり、年齢も専門性も違う人々と関わることで今までとは異なったものの見方や考え方に会い、プロジェクトメンバーそれぞれが広い視野を持つことができた。また、筆者らの大学での学びが実際の社会の中で生かされている場面を目の当たりにすることで、大学の講義では得られない経験やスキルを身に着ける機会になったとともに、情報デザインの社会における重要性や可能性を実感することができた。さらに、インターネットや紙面では知ることのできなかつた地域の魅力や価値を発見し、それぞれの地域に対して第三者の視点から意見を発することで、対象コミュニティにも影響を与えることができた。それらを踏まえて一年間の全活動の学びとして、地域コミュニティとの継続的な活動を振

り返りその過程や成果を分析することで、相互に影響しあう活動ができていたと感じた。また活動を資料としてまとめ、対象コミュニティに返還することで、活動に価値や意味を見出すことができた。

参考

- ・加藤文俊、木村健世他『つながるカレーコミュニケーションを「味わう」場所をつくる』フィルムアート社、2014年
- ・Sylvia Libow Martinez、Gary Stager 他『作ることで学ぶ—Makerを育てる新しい教育のメソッド』オライリージャパン、2015年

協力団体

- ・荒木敬仁さん（厚沢部町）
 - ・江差バル街実行委員会
 - ・金森春奈さん
 - ・株式会社ハルキ
 - ・くら Cra(北海道西部地区バル街)
 - ・シエスタ函館
 - ・世界に一冊だけの本・展
 - ・だて歴史文化ミュージアム
 - ・Tbase
 - ・洞爺湖芸術館
 - ・函館市青年センター
 - ・北海道教育大学函館校
 - ・北海道渡島総合振興局
 - ・北海道渡島総合振興局
 - 「みんなですすめる木づかいプロジェクト」
 - ・まるたま小屋
 - ・無印良品シエスタハコダテ
 - ・森町
 - ・レインボーはこだてプロジェクト（PHR）
- （敬称略、順不同）